

大雪山登山史

伊藤 秀五郎



「富士山に登って、山岳の高さを語れ。大雪山に登って、山岳の大きさを語れ」とは、大町桂月が大正十年八月に、大雪山を踏破したときの紀行文の冒頭の一句である。このときは、大雪山の地理に詳しい旭川存住の成田嘉助を案内として、また登山路のなかった黒岳を層雲峡から登り、北剣岳・白雲岳・旭岳を経て松山温泉に下った。この紀行文が『中央公論』に掲載され、また大正十二年に雑誌『太陽』に、「北海道山水の大観」を書いて大雪山を紹介したので、大雪山の名はひろく全国に知られるようになった。

二

しかし、大雪山の登山の歴史は古い。小泉岳や白雲岳の山頂近くで多数の石器や鍬が発見されているから、古くから先住民がすでに大雪山に足跡を残していたに違いない。二、〇〇〇メートルの高所だから、定住していたわけではなく、おそらく狩猟のために登山して、このあたりを根拠地にしたのであろうか。

記録にある登山としては、安政四年（一八五七年）に石狩役所在勤の松田市太郎が、石狩川上流から忠別岳附近を通って忠別川に下り、さらに十勝岳に登ったのが嚆矢である。松浦武四郎の「石狩日記」には、大雪山系のいくつかの山名が出ているが、かれ自身は登山はしなかったようである。明治になって、ひろく本道の地質調査・地形調査に従った開拓史雇のライマンは、明治七年七月に石狩川本流をさかのぼり、石狩岳附近の分水嶺を越えて音更川に下っている。

三

本格的な陸地測量がなされたのは明治十七年（一八八四年）で、内務省地理局の福士成豊の測量隊が、美瑛川をさかのぼり、オプタテシケ山からトムラウシ岳、無名山（おそらく現在の化雲岳）を経て忠別岳まで縦走して忠別川を下り、周辺連山の位置を測量したのは、当時としては重要な大作業であった。明治二十年刊行の「北海道全国」には現在の旭岳は東オプタテシケ山となっている。このころまでが探検時代の初期である。

陸地測量部の、本道中央高地一帯の本格的三角測量がはじまったのが明治三十三年で、一等三角点の旭岳は同年九月、同部員・館二潔彦によって選定され、三角点は「ヌタツタリ、埋石が三十四年十月、観測は三十八年七月から九月にかけて行なわれた。下って大正十年八月に、陸地測量部員・稲田己喜雄らの黒岳、旭岳付近の三角測量を終え、大正十三年に五万分一地形図「旭岳」と「ヌタツカムシユベ山」が発行された。

四

旭岳の団体登山が最初に行なわれたのは、明治三十六年五月十一日で、私立上川文武館の生徒二十一名であった。明治三十六年に開校された上川中学（大正四年、旭川中学と改名）では、明治三十九年から学校行事として、毎年職員生徒の登山隊を組織して大雪山を試みるようになった。最初のころの登山案内には、測量に従事した人夫があった。明治四十三年八月に、日本山岳会会員・大平 晟をピウケナイから旭岳に案内したのは、佐藤岩蔵であった。成田嘉助は盆栽を本業としたが、大雪山の地理に精通した

人で、案内者の草分けでもあった。

明治四十四年、地理の教師として旭川中学に赴任した小泉秀雄は、大正十四年までに前後九回、成田嘉助を案内としてひろく大雪山群を踏査し、大正七年に大部の報文「北海道中央高地の地学的研究並植物分布の研究」を『山岳』（山岳第一二年、第二・三号合併号）に発表した。後に大雪山系についての精しい地誌であり案内書でもある『大雪山、案内と登山』（大正十五年発行）を著した大雪山研究の先駆者であった。

五

大正九年七月に、慶大山岳部の大島亮吉、田中三晴は、成田嘉助、高橋浅市の二人を案内として、松山温泉からカウシナイ沢をさかのぼってトムラウシ山に登り、スタップヤンベツを経て石狩岳に達し、石狩川を下る山旅を試みた。これは記録に残る山行の一つで、大島の紀行文がわが国の登山界に与えた刺激は大きかった。

北大の学生が中央高地に入ったのも、大正九年の夏からである。板橋敬一、松川五郎の一行が、アイシポポから姿見地に出て二晩野営、旭岳に登ったのが最初である。翌十年七月には、板橋敬一、斎藤謙、佐々木政吉の三名が高橋浅市を伴ってユコマベツ造林小屋から入って湯沢に野営、翌日旭岳に登頂、さらに忠別岳、化雲岳をまわって松山温泉に下った。

大正十二年七月に、田口鎮雄、佐々木政吉、藤江永次の三名が人夫二人をつれて音更川から石狩岳に登り、石狩川を下った山旅も、当時としては大島たちの石狩岳登山に劣らぬ長途のものであった。七月十四日に帯広を出発して、メトセップ、三侯と歩き通して、石狩岳山頂に達したのが十日目の二十三日だったという事は、当時の山の場合を彷彿とさせる。

この年の七月、慶大の大島亮吉、田中三晴、大賀道徳など五名が、ふたたび成田、高橋はか一人の人夫を伴って、音更川上流の谷々を十日あまり歩いた山旅も特筆に値する。このときは計画にあった石狩岳、ニベツ山などの登頂はできなかったが、当時は文字どおり藪蒼としていた森林溪谷を、沢から沢へ歩く面白さを存分に味わう登山方式の先駆的な山行で、大島亮吉の「北海道の夏の山」の一文は、その面白さを余すところなく表わしている。

ニベツ山には、北大の沢本三郎が人夫・長田橋松と二人で、大正十五年七月十九日

にホロカオトブケ川六ノ沢から登頂している。同年七月、西川桜は人夫高橋浅市と二人でイトムカ川から武華山、武利岳に登り、十六日登頂、ニセイチャロマップ川に沿って層雲峡に下った。

六

北大のスキー部は明治四十五年に設立されたが、大雪山のスキー登山は大正十年三月にはじまった。ユコマベツの造材小屋を根拠地として、加納一郎、松川五郎、板橋敬一、西尾稔、斎藤謙の五名が参加し、二日間にわたって旭岳を試みたが、山頂近くに達しながら、悪天候のため登頂は果たせなかった。翌十一年一月に再挙した板倉勝宣、加納一郎、後藤一雄、松川五郎、板橋敬一によって、九日に山頂に達した。朝六時に小屋発、頂上附近はシュタイグアイゼンを用い、午後零時五十分登頂、一時三十分から小屋に帰着した。さらに同年三月三十日には、板倉、加納、板橋の三名が層雲峡温泉から黒岳のスキー登山に成功している。

十勝岳には明治三十八年から硫黄鉱山があり、大正時代には冬期も頂上に近い火口探掘所の作業はしていたから、鉱夫で積雪期の山頂に立った者がいたことは間違いない。北大のスキー部員・六鹿一彦らが、はじめて冬の十勝岳山頂を極めたのは大正九年の三月二十七日であるが、このときはスキーは用いなかった。スキー登山で成功したのは大正十三年一月二十七日で、佐々木政吉、田口鎮雄、藤江永次、伊藤秀五郎、小森五作の五名が、前夜、上の鉱山事務所に泊り、二十七日の一時三〇分に登頂した。

上ホロカメットク岳のスキー初登山は昭和三年一月七日で、吹上温泉を根拠に沢本三郎、和迅広樹、野崎健之助、須藤宣之助、井田三清、牧野要三の六名が参加した。

昭和三年十二月から北大山岳部が毎年十勝岳スキー合宿をするようになって、十勝岳をはじめ富良野岳、美瑛岳岳など頻りに登られるようになった。

大正十二年一月に、大雪山の紹介と登山奨励を目的とする北海道山岳会が旭川に設立された。その年の八月には四七名の参加した旭岳登山会を行ない、十三年には同会の努力がみゆり、帝室林野局と北海道庁によって旭岳と黒岳に石室が建設され、登山路の改修が行なわれた。この年に大雪山調査会が設立され、大正十五年に、前述の小泉秀雄の『大雪山』と河野常吉の『石狩川上流探検開発史』が同調査会から発行された。大正十二年ごろまでが、だいたい啓蒙期とみなされる時代である。

大正十二年に北大で夏スキーが実用化されてからは、広範囲にわたって残雪期の登山が試みられた。石狩岳に挑んだのは大正十三年五月で、一行は佐々木政吉、藤江永次、田中二郎、小森五作、伊藤秀五郎の五人で、荷役に高橋浅市を伴った。松山温泉から化雲岳を経てヌタツブヤンベツを下り、二十五日、石狩岳を山頂近くまで登ったが、吹雪のため登山を断念して松山温泉に引き返した。翌十四年三月に伊藤秀五郎の一行八名が十日間、黒岳石室に滞在して黒岳・凌雲岳・北嶺岳・北海岳・白雲岳・熊ヶ岳・旭岳に登った。ついで五月にも山口健児の一行が、黒岳小屋を根拠として同様の登山を試みた。この二回の山行で、積雪期の大雪山群の実態はほぼ明らかになった。

大正十五年五月十七日に、野中保次郎の一行は黒岳から忠別岳を経て石狩沢から石狩岳の登頂に成功している。これが積雪期の石狩岳の初登頂である。このころ、北大山岳部の第一目標は厳冬の石狩登山であった。石狩岳が中央高地の盟主であり、当時、冬期の登頂がもっとも困難な山だったからである。

この課題は、昭和三年二月七日に解決された。そのときは石狩川上流のホロカイシカリ川付近とシビナイ川合流点の二カ所に、前年夏に堅牢な仮小屋を建設し、大函の通過可能な凍結期に行なわれた。一行は、伊藤秀五郎、小森五作、和辻広樹、井田 清、西川 棧、野中保次郎の六名と人夫二名であった。

八

十勝岳から大雪山への縦走がはじめて行なわれたのは大正十五年五月で、山口健児、山泉 浩、原 忠平の三名に人夫・長田福松が加った。夏スキーを用いた六日間の行程で、吹上温泉から十勝岳、オプタラシケ山、トムラウシ山、化雲岳を経て天人峽温泉（松山温泉）に下った。夏期の縦走は、昭和二年七月に坂本正幸、上田一雄、宮井海平、大谷広直、徳永芳雄と人夫・鈴木由吉の六名によって、やはり吹上温泉を起点に、黒岳を経て層雲峡まで十四日間の行程で遂行された。積雪期にこれと同じコースの縦走が成功したのは昭和五年五月で、一行は安積稔三、金光正次ら六人と人夫一名であった。

このころになると、山脈縦走とならんで、かつて大島たちの試みたような、いくつかの山と沢歩きを組合わせた長途の山行がしばしば試みられるようになった。たとえば昭和四年八月には、伊藤秀五郎、中野征紀など五名と人夫二人の一行は、二週間にわたって

て、石狩岳とニベソツ山を中心に、音更川、石狩川、十勝川の源流域を探勝した。昭和五年八月には、徳永正雄、相川 修ら四名が人夫を伴わず、十四日の日数をかけてニセイチャロマップ川から屏風岳、武利岳に登り、さらに石狩川をさかのぼって石狩岳からトムラウシ山をまわって層雲峡に下った。翌六年七月には、豊田春満、高木秀夫が人夫長田福松をつれてシーシカリベツ川からウペペサンケに登り、音更川をさかのぼって石狩岳に達し、石狩川を経て忠別岳から黒岳へ出ている。

九

このころまでに冬の大雪山系の登頂も一段落したが、残された愛別岳は昭和六年五月に奥田五郎の一行により、また愛山溪を起点とする北嶺岳、旭岳へのスキーコースの開拓は昭和七年十二月から八年一月にかけて佐々保雄、村山林治郎によって行なわれた。

十勝岳から大雪山への厳冬の縦走は、昭和十年から十七年にかけて北大山岳部と旭川山岳会によって数回試みられたが、いずれも悪天候のため目的は達せられなかった。戦後、昭和二十七年、木崎甲子郎をチーフリーダーとする北大山岳部によって約八〇キロメートルにわたる縦走が成功した。この成功によって、大雪山系スキー登山の草分け時代は完全に終了したといえよう。

後 記 本文の記録は、主として『山岳』（日本山岳会）、『山とスキー』（山とスキーの会）、『登高行』（慶大山岳部）、『北大山岳部々報』（北大山岳部）、『桜星会雑誌』（北大予科桜星会）などによったが、頁数の関係で、重要と思われるものを選んで記述した。本文中に記した著書以外、とくに北海道の登山史に関係のある主な文献につきものがあつた。

伊藤秀五郎 北海道・千島の山『日本地理大系、山岳編』改造社（昭四）

石田二三雄編 大雪山・層雲峡の探険と開発の記録『大雪山のあゆみ』層雲峡観光協会（昭四〇）

高沢光雄 大雪山登山の記録『大雪山』石川俊夫監修 北海道撮影社（昭四七）

淡川舜平 大雪山・石狩川源流探険史と登山『山書研究、一八号』日本山書の会（昭四七）

高沢光雄編 北海道登山史年表『北の山と人』日本山書の会（昭四七）